16　　逢坂の関の清水の場所 　文法　助動詞⑧　終止形・連体形など接続の助動詞

ある人のいはく、ののといふは、と同じ水ぞと、㋐なべて人知りるⓐめり。①しかにはあらず。清水は別の所にあり。今は水もなければ、そことも知れⓑる人だになし。に、円実坊のといふ老僧、ただひとりその所を知れり。かかれど、「さることや知りたる」とたづぬる人もなし。「我死なむ後は知る人無くてやみぬⓒべきこと」と、②人に会ひて語りけるを伝へ聞きて、の阿闍梨知れる人の文を取りて、建暦の初めの年、あまりのころ、三井寺へ行き、阿闍梨に対面して言ひければ、「かやうに古き事を聞かまほしくする人も㋑かたく侍るめるを、めづらしくなむ。③いかでかつかまつらざらむ」とて、伴ひて行く。今は小家のへになりて、当時は水もなくて、見所もなけれど、昔の名残、面影にうかびて、になむおぼえ侍りし。

語注

逢坂の関の清水＝逢坂の関（現在の滋賀県大津市）は逢坂山にあった関所。清水はその関の付近にあったという湧水。

走井＝逢坂の関の西方にある、名水とされた湧水。

三井寺＝現在の滋賀県大津市にある天台宗寺門派の本山。

円実坊の阿闍梨＝人物は未詳。「阿闍梨」は高僧の職名。

基本古語

めづらし（形シク）＝すばらしい。

【原文】

ある人のいはく、ののといふは、と同じ水ぞと、なべて人知りるめり。しかにはあらず。清水は別の所にあり。今は水もなければ、そことも知れる人だになし。に、円実坊のといふ老僧、ただひとりその所を知れり。かかれど、「さることや知りたる」とたづぬる人もなし。「我死なむ後は知る人無くてやみぬべきこと」と、人に会ひて語りけるを伝へ聞きて、の阿闍梨知れる人の文を取りて、建暦の初めの年、あまりのころ、三井寺へ行き、阿闍梨に対面して言ひければ、「かやうに古き事を聞かまほしくする人もかたく侍るめるを、めづらしくなむ。いかでかつかまつらざらむ」とて、伴ひて行く。今は小家のへになりて、当時は水もなくて、見所もなけれど、昔の名残、面影にうかびて、になむおぼえ侍りし。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

逢坂の関の清水の場所を知るのは、今や〔　　　　　　　〕の〔　　　　〕だけである。彼に〔　　　　〕し案内してもらったところ、今は小家の陰になっており、〔　　　〕もれ、〔　　　　〕もないけれど、かつての〔　　　　〕がうかがえた。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ。（㋑は終止形でよい。）〈3点×2〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ～ⓒの助動詞の文法的意味と活用形を答えよ。〈3点×3〉

ⓐ〔　　　　　〕〔　　　　　〕形　ⓑ〔　　　　　〕〔　　　　　〕形

ⓒ〔　　　　　〕〔　　　　　〕形

問四　チェック問題　助動詞⑧　終止形・連体形など接続の助動詞

次の傍線部の助動詞について、文法的意味を答えよ。〈2点×3〉

1　ぞ鳴くなるにして（万葉集）

2　冬枯れの気色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。（徒然草）

3　月のうちののごとき君にぞありける（伊勢物語）

1〔　　　　　〕　2〔　　　　　〕　3〔　　　　　〕

問五　傍線部①を「しか」の示す内容を明らかにして現代語訳せよ。〈6点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　傍線部②とあるが、このときの阿闍梨の思いとして最も適当なものを選べ。〈6点〉

ア　自分が死んだ後に、清水の本当の場所を知るものがいなくなってしまうのが無念である。

イ　あまりに時間がちすぎたために、清水の本来の場所を忘れてしまったのが口惜しい。

ウ　年老いていくごとに、清水まで案内しようにも体力的に無理になったことが情けない。

エ　清水がれてしまい、かつての美しい姿が見る影もなくなったことが残念でならない。

〔　　　〕

問七　傍線部③を現代語訳せよ。〈6点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問八　本文の内容に合致するものを一つ選べ。〈11点〉

ア　関の清水について詳しい話を阿闍梨に尋ねたが、満足のいく答えは得られなかった。

イ　阿闍梨が亡くなっていたために、仕方なく独力で清水の場所を探りあてた。

ウ　清水は何の見所もないところであったために、誰からも忘れ去られてしまった。

エ　水も流れていない清水に、ありし日の幻を見て、風雅な気持ちを呼び起こされた。

〔　　　〕

【解答】

問一　ただひとり　老僧　対面　水　見所　面影

問二　㋐＝一般に　㋑＝めったにない〈3点×2〉

問三　ⓐ＝婉曲・終止形　ⓑ＝存続・連体形　ⓒ＝推量・連体形〈3点×3〉

問四　1＝推定　2＝打消推量　3＝比況（例示）〈2点×3〉

問五　逢坂の関の清水は走井と同じものではない。〈6点〉

問六　ア〈6点〉

問七　どうしてご案内申し上げないだろうか、いやご案内申し上げよう。〈6点〉

問八　エ〈11点〉

【現代語訳】

ある人が言うことには、逢坂の関の清水と呼ばれているのは、走井（と呼ばれている湧き水）と同じ清水であると、一般には人が知るようです。（しかし）そうではない（とのことだ）。（逢坂の関の）清水は別の所にある。今は水もないので、そこと知っている人さえいない。三井寺に（いる）、円実坊の阿闍梨という老僧が、ただ一人そのありかを知っている。しかし、「そういうことを知っているか」とたずねる人もいない。「私が死んだとしたらその後はきっと知る人もなく終わるであろうこと（でございます）」と、（老僧が）人に会って語ったということを伝え聞いて、その阿闍梨を知っている人の手紙を手に取って、建暦元年（一二一一年）、十月二十日過ぎ頃、三井寺へ行き、阿闍梨に対面して（清水のありかを知りたいと）言ったところ、「このように古いことを聞きたいという人はめったにいないようでございますが、すばらしく（ございます）。どうしてご案内申し上げないだろうか、いやご案内申し上げよう」と言って、連れ立って行く。（その場所は）今は小さな家の裏側になって、現在は水もなくて、見所もないが、昔の（水があったころの）名残が、面影として浮かびあがって、優雅に思われました。

【補充問題】

問１　「めづらしくなむ」（７行目）の後に省略されている言葉を二字で答えよ。

問２　「逢坂の関の清水」（１行目）はどこにあるのか。最も適当なものを選べ。

ア　走井

イ　円実坊

ウ　三井寺

エ　小家の後方へ

問３　「我死なむ後は知る人無くてやみぬべきこと」（４行目）とは、どういうことか。簡潔に説明せよ。

【補充問題解答】

問１　侍る

問２　エ

問３　阿闍梨が亡くなると、誰も逢坂の関の清水の場所がわからなくなるということ。